

石・木・土

縄文時代の
土器



1 塩屋に生きた縄文人は…

縦に割れやすい「^{しおやいし}塩屋石」に注目した！

飛騨市宮川町、塩屋の谷川では、「塩屋石」と呼ばれる岩盤を今でも間近に見ることが出来ます。今から 4500 年前、その石の割れ方に大いに注目したのは、そこに住む縄文人たちだったのです。

塩屋の民は、この場所で生活していくために、狩猟のために必要な道具を作り出そうとしました。それは、土や粘土から作る食器類の土器だけでなく、石を叩き割って、その鋭い割れ口のある破片を活用しての道具です。そう！打製石器（石おの・石やり・矢じり）です。

そして、この塩屋石を割ってみると…なんと、太鼓を打つバチのように「棒」の状態で飛び散ったのです。

狩猟道具としては、活用しにくかったはずなのに…。つまり、食べ物を得る道具のためには、見向きもされない運命にもあったはずなのに…。この特徴を利用しようと考えたのは、塩屋に生きた縄文人たちだったのです。

では、塩屋の縄文人たちは、いったい何を作り出そうとしたと思いますか？それは…。「石棒」^{せきぼう}と後々言われるモノでした。

今から 4500 年前の縄文中期には、長さ 1.2m 直径 10cm の丸太のような「石棒」だったのです。さらに 3500 年前の縄文後期には、長さ 50cm 直径 5cm と半分以下のミニサイズになりますが…（イ～や！ それにしても大きいですよね）…とにかく、縄文人は、この塩屋の地で生活をしながら、石棒を何年間も作り続けてきたのです。この塩屋には、石棒製作場の遺跡^{いせき}が 2 か所も出てきました。

いったい何のために、このようなモノを作ったのでしょうか？

生活をしていくために、どんな役に立つモノなのでしょう？

一本作るだけでも相当な日数と重労働を必要とする作業のはずです。…この石棒づくりにかけるオモイ・ネガイとは…いったいどんなことなのでしょう？



塩屋石の石棒

中央の最大のは長さ 116cm、幅 17cm、厚さ 16cm あります。

2 石棒製作工場が語りかける「石棒に寄せるオモイ・ネガイ」… それは… 平安への祈り …なのだろうか？

「オモイ・ネガイ」のお話をはじめる前に…

いったいなぜ、塩屋という地に石棒工場があったといえるのでしょうか。まずその証拠を2つ上げます。

証拠その1 …作業工程ごとの造りかけとその道具の発見

この石棒は、丸太のような形だと言っても…やっぱりどう見てもこの形は、男性器そのものです。で…、このような形を作り出すのには、どんな流れ（作業工程）であったのかというと…大きく次の4つの工程があったようです。

①山肌に見える塩屋石の岩盤をたたき割り、柱・棒のような形で割れる石材を取り出す。

②その棒状石材の角が鋭くとがっているままなので、そぎ落とす。

（剥離；はくり…はがしとること）

③棒のままでなく、より男性性器に似せた形にするよう、少しずつ掘り出していく。

（敲打；こうだ…トントんと打ちたたき、細かい細工をすること）

④岩肌をどれだけでも滑らかにして、美しくする。（研磨；けんま…みがくこと）

さて、塩屋「島遺跡」では、22本の「作りかけの石棒」が、これらの①～④各工程段階ごとに発掘されました。そして、剥離・敲打・研磨の段階で使っていた道具（塩屋石の角をたたき割るハンマーや表面を滑らかに磨く砥石）と一緒に出土したのです。

剥離（はくり）

塩屋石のカドをハンマーでたたいてはがしています。



敲打（こうだ）

まだ角ばっている石材をトントんとたたき、丸みとくびれを作ります。



研磨（けんま）

全面をみがいて完成です。



証拠その2 …ここでしか取れないはずの塩屋石で作った石棒が、遠方各地で発見

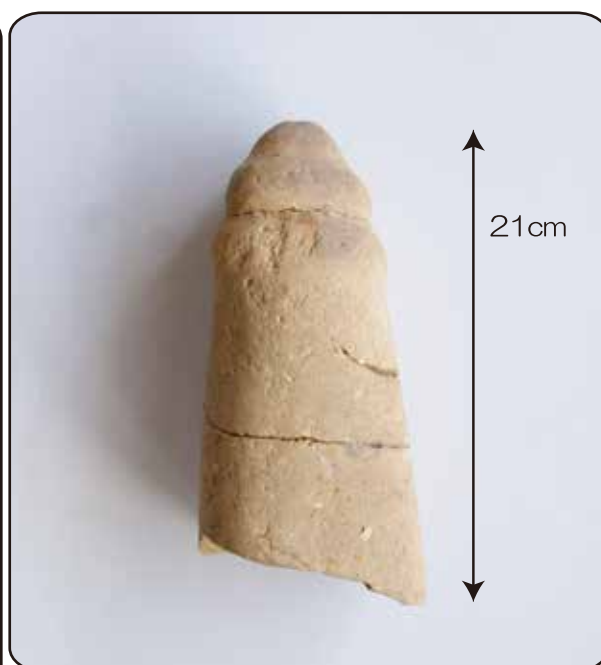
この塩屋「島遺跡」では、26軒分の竪穴式住居跡が出土しました。つまり、1つの村・町と言ったらいいでしょうか？何十人かの集団で生活していたということです。そして、各作業途中の石棒も一緒に掘り出されました。

ところが、驚きはここからです。塩屋石は、塩屋でしか取れないし、塩屋で石棒を作って自分たちが使うはずなのに…

なんと南方向には、古川町「中野山越遺跡」(塩屋から約30km離れている所)…。そして北方向には、富山県魚津市「天神山遺跡」(塩屋から約70km離れている所)…。という南北で100km離れた遠方の遺跡から塩屋工場産である石棒が、出てきた事実です。明らかに塩屋産の石を移動させているのです。



飛騨市寺林遺跡の石棒



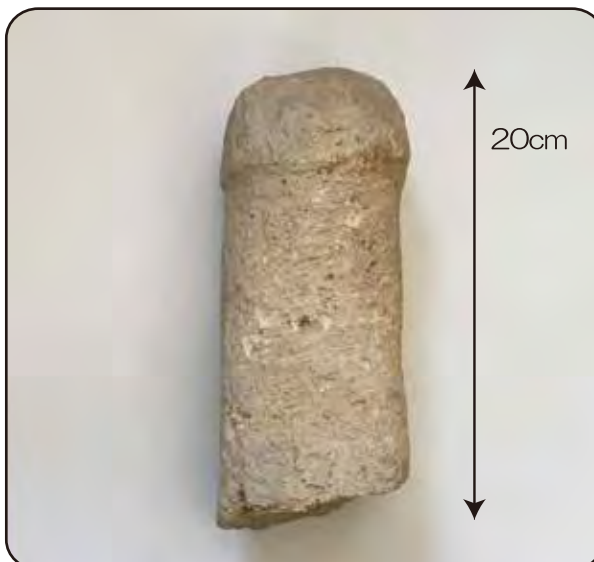
魚津市天神山遺跡の石棒



高山市寺東遺跡の石棒



飛騨市寺林遺跡の石棒



飛騨市瑞穂遺跡の石棒

3 エッ！！捨てることが…オモイ・ネガイ？…ホント！

では、石棒に寄せる「オモイ・ネガイ」にお話を戻します。2では、石棒工場地であったらう証拠を2つ上げました。それは工程ごと作りかけの石棒が発掘されたこと。そして、遠方でも塩屋の石棒が出土していることでした。

それをもとに考えてみましょう。塩屋縄文人は、石棒に対してどんな「オモイ・ネガイ」を抱いていたと思いますか？お金(?) 儲けの商売だったのでしょうか？いたい、何を『値打ちなこと』として考えていたのでしょうか？

塩屋「島遺跡」では、石棒を「祈りをささげる儀式」に使うために作っていたようです。そりゃ〜そうでしょう。だって、縄文時代の平均寿命は、30～40歳。天変地異(台風、地震、雪崩、地崩れなど)が、1つ起きりゃみんなの命の保証はありません。ケガ病気があっても病院はないですし、勝ち取ってくる食べ物がないりゃ、栄養失調や飢え死にがそこに待っています。

そんな危険と不安が、毎日毎日隣り合わせにある中で…。弱い人間が、何かにすがり、祈り…「どうか、何事も恐ろしいことが起きないでくれ!」という「オモイ」だけでなく、「死にたくない!」や「子どもがたくさんいてほしい!」という生命の維持や、命の再生や出現を「ネガイ」たくなる気持ちは十分わかります。



立てられた塩屋石

ところが、ミステリーはここです。祈りをささげた後に、めちゃくちゃに壊して、石棒としてはダメにしてしまっていることです。「島遺跡」で見つけた3本の石棒。それは、研磨まで済ませた見事な完成品であった石棒。それを祭壇に置き、祈りをささげ儀式に使ったはずの物。しかし、そのあとです。コッパミジンに…。粉々に…。作り出すことが相当な労力であるのに…。壊すことも相当なる労力なのに…。

つつい私たちは、縄文人たちが、祭壇^{さいだん}を用意して石棒をシンボルとして祭り上げ、そこに向かって何かをお願いする。と…そこまでのために「石棒」を作ったのだらうと想像しがちですが…



折られて役目を終えた石棒

いやいや、そんな単純ではなさそうです。ひょっとして、まずその石棒を時間と労力と技術を駆使して「作ること」の作業自体も……さらに、一心になって、みんなの願いを込めた石棒を「壊すこと」も…4500年前の人類の「オモイ・ネガイ・祈り」の姿なのかもしれません！

4 塩屋は、石棒のアトリエ・生産センターにまでなった！

「島遺跡」は今から4500年前のお話の遺跡でした。もう一つの「塩屋金清神社遺跡」は、そのあとの3500年前の遺跡です。

全国で一般的な縄文遺跡での「石棒」というものは、せいぜい数本だけの出土です。ところが、驚きはこの塩屋金清神社遺跡 1 か所から、なんと 1,074 本もの石棒が出土したということです。島遺跡での 22 本の石棒出土でもすごいことなのに…その 50 倍以上の出土量とは、まったくの驚きです。

それはどういうことかということ、島遺跡以降の塩屋での取り組みのなかで、次第に住民たちが、石棒を専門に作り出す職人となっていったのでしょう。次の子孫たちに「技術」を伝授しながら、塩屋全体が石棒専門の「仕事部屋・仕事場」になっていきました。さらに、その規模を大きくして「生産センター」となっていったのではないかと想像できます。

その証拠は 2 つです。1 つは、1000 本以上というおびただしい出土量。もう 1 つは、作るための道具（塩屋石をたたき割るハンマーや表面をみがく砥石）と一緒に、石棒の作りかけの未完成品が出土されていることです。



塩屋金清神社遺跡の発掘調査の様子。



石棒が見つかった様子。

5 石棒に何をすがった？ 縄文人の祈りとは…！

石棒専門の「仕事部屋・仕事場」「生産センター」のピークだったといえる「塩屋金清神社遺跡」ではありますが、石棒づくりの工房そのものの跡は、残念ながら見つけれなかったのです。

ただし、谷を埋めた土砂から発見された 1,074 本の石棒に加え、土中に埋まっているものが何千本もあると考えられています。まさにここで作っていたはずだと思うざるを得ません。

さて、この縄文人たちは、何を「オモイ・ネガイ」、これだけの石棒を作っていたのでしょうか？

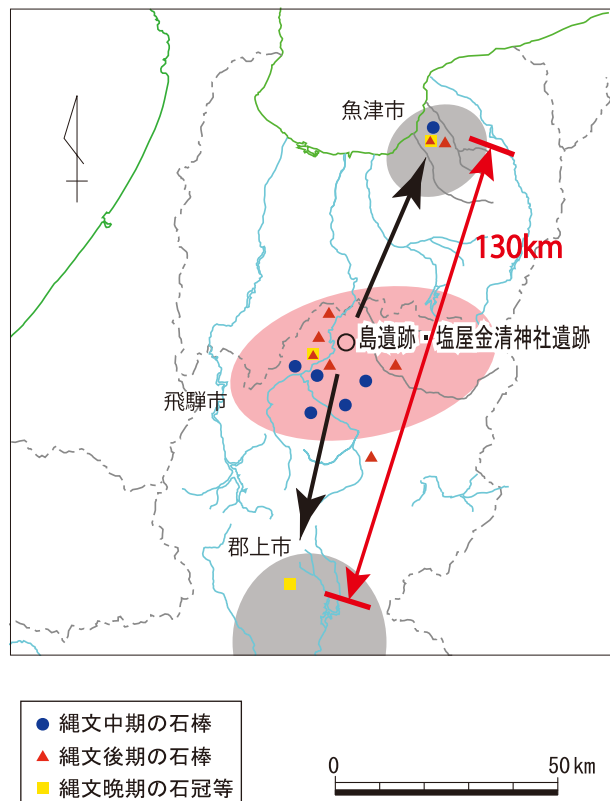
今一度考えてみましょう。

飢えや寒さなど「狩猟収穫量の不安定さ」や「容赦なしに迫ってくる自然災害」への苦しみや恐怖から逃れたいという「生きること」への「オモイ・ネガイ」なのでしょうか？それともキノコ、山菜、木の実、クマ、シカ、イワナ、ヤマメ、アユ、マスなどなど山の幸・川の幸が、四季を通じて豊富にあり、次々と湧き出てくるぐらゐの豊かな恵みを与えてくれるこの土地「塩屋」の「生きているモノ」への「オモイ・ネガイ」なのでしょうか？

いずれにしても生きていくことは、現代では想像もつかないくらいリスクが大きかったでしょう。

そんな中で…石棒を改めて見つめていると…必死に何かにすがるような「オモイ・ネガイ」があって、祈りを一心にささげる縄文人たちの姿が見えてきませんか？

もし、そうでなかったら…飛騨・美濃・北陸地区一円の遺跡に「塩屋石の石棒」があるわけないですよね。縄文人たちにとって、それくらいどうしても大切な品物だったはずですよね。



飛騨・美濃・北陸一円に分布する様子

6 1000 年間で祈りが変わったの？…

2 つの遺跡の移動が物語る…！

22 本の石棒発見地の「島遺跡（4500 年前）」と 1,074 本発掘された「塩屋金清神社遺跡（3500 年前）」では決定的な立地条件の違いがあるのです。1000 年の間にその製造工場は、塩屋地内で自然条件がまったく違う場所に移動したのです。それは、なぜ？どんな理由があったのでしょうか？

どうやら…「祈り」の質が違ったのではないかと考えられるのです。

その場所は、次のような違いがあるのです。島遺跡は、宮川という大きな川の川沿いです。ところが、塩屋金清神社遺跡は、山のふもとです。

島遺跡の住人は、自分たちの「祈り」に使うためと他地区の人々の「祈り」のために石棒を作るということを考えていたようです。山にある「塩屋石」の岩盤から石材を取り出し、「剥離」と「敲打」という 2 つの工程を山の中で済ませていたようです。そして、大まかなところまで作って、川のそばまで持っていき、そこで「研磨」をすませ仕上げたようです。そこから川を使って他の場所へ運んだようです。

一方、塩屋金清神社遺跡は、その川の上流の山裾に位置しています。なぜ、材料となる「塩屋石」の岩盤に近いところで、最後の仕上げまでをすませってしまう必要があったのでしょうか？…それは、1000 本以上という大量の石棒から推測できます。

そうです。より早く作り出すことができ、より安定して（山側の上流水の方が、研磨に最適。逆に下流では、台風増水で作業中止になる）、より整った品をめざし（移動中に壊れたり欠けたり事故発生のない場所）、そして、なによりも大量生産できるため…こういった素材になる岩盤に、より近いところに工場を求めて、移動していったのだと考えられます。



島遺跡は宮川沿いに、塩屋金清神社遺跡は山のふもとにあります。

さらに、もう一步踏み込んで考えると……。4500 年前の石棒は、作った石棒にむかって「オモイ・ネガイ」を込めて祈っていたのでしょうか。でも、1000 年たつうちに、その石棒をひたすら無心になって作り続けること、それを作ること自体が「オモイ・ネガイ」であり、祈りであったのではないかと考えられないでしょうか。

現代人の我々は、自分に都合のいい時、自分に都合のいいことを「オモイ・ネガイ」がちです。合格祈願や無事故や健康などと願をかけ、祈っています。でも縄文人は、もっと純粹にひたむきに…、何か自分に都合よい交換条件なしに…、黙々と「石棒」を作り出す姿そのものに…、「祈り」の姿を見出していたのかもしれない。

7 ひょっとして 1000 本の石棒って…

商売や流通のためではなかったの？…

塩屋石の「石棒」は、飛騨・美濃・北陸地区の各地 14 遺跡（中期 6・後期 8）から数点ずつ見つかっています。でも、もし売り買いや製作依頼によって大量生産をし、各地に運んだのなら…この他地区からの出土量としては、あまりにも少なすぎると思いませんか？

なぜって…「塩屋金清神社遺跡（3500 年前）」から 1,074 本も発掘され、まだ数千本が土中に眠っているのですから…。

ということは、他地区の住民から製作依頼を受けたり、交換目的があったり…ということは、あまりなかったのではないのでしょうか！ いえ、ほとんどなかったのかもしれない。

エッ？… じゃ～自分たちの「祈り」だけのために…石棒を作ったの？

それを考えるヒントとして…こんな状況があるのです。「島遺跡（4500 年前）」では、穴に埋められた土器があるのですが、その上に塩屋石でふたをしていたり、塩屋石を立てた状況と一緒に埋められていたり…。また、明らかに「祈りの儀式」用に塩屋石を並べていたり、せっかく作った石棒をわざわざ粉々に壊していたり…。

一方で「塩屋金清神社遺跡」の石棒でも同様の痕跡のほか、石棒をダメにしてしまう「破壊行為」をやっていた跡があるのです。

何ヶ月の時間をかけたであろう…。コツコツと…力や気持ちを込めて…打ち付け掘ったであろう…。

そんな苦労して作った石棒を…同じぐらいの労力をかけて壊してしまう。しかも、あっさりと捨ててしまったかのような状況にしてしまう縄文人。

ここが、縄文時代における人々の「死生観」であり「自然観」を表しているのではないのでしょうか。そう！例えば、花が咲き、実は実り、やがて朽ちる。つまり「死」であります。しかし、強い実は、春になると「芽吹き」を達成させて、また大きな実を生み出す。縄文の民は、人間や動植物の「生」と「死」の「再生と循環（再び生き返ること・ぐるぐる廻って元に戻る）」という大自然の筋道をよくわかっていたのでしょ

うか。石棒を何千本も「作り」「使い」「壊す」という生活をするこ

とで、自分たちの命の「誕生」「生きる」「死ぬ」という「再生と循環」を表わそうとしていたのではないのでしょうか。



塩屋石で土器に蓋をしています

8 幸せを…祈っていたんだ！…

縄文人も。…

今回注目した「塩屋石」は、正式名を「黒雲母^{くろうんも} 流紋岩質^{りゅうもんがんしつ} 溶結^{ようけつ} 凝灰岩^{ぎょうかいがん}」と言います。

キラキラと光る黒雲母の細かな結晶が、あちこちに美しく見て取れ、柔らかく、加工しやすい石です。おまけに、まるで、これで石棒を作ってくれとばかりに柱のように割れる特徴を持った石です。火砕流が冷えて固まった凝灰岩の一種だそうです。その原石の山が、谷を埋め尽くさんばかりにむき出しに見えていました。

縄文の民にとって、平安への祈りや信仰の対象にしたいと思っていた「石棒」にそっくりな物が、自然にしつらえてあったというわけです。

縄文人が狩猟のために山に分け入って…その原石の山肌を目の当たりにした時、畏敬^{いけい}の念（恐れ敬う気持ち）を抱いたはずです。そして、「石棒」を何千何万本と積み重ねたように見える岩肌は……、まさに神の姿を見た！という想いだったかもしれません。さらに、この地こそ神聖な土地であると思ったのではないのでしょうか？



間近に見える塩屋石の岩壁



塩竈金清神社

その縄文時代から 4200 年たった江戸時代の人々も、そのまた 300 年後の現在の人々までも…延々と同じことを感じてきたようです。それは、この縄文人の作った「石棒」を見るだけで……生命の「再生と循環」をイメージしたようです。「子宝に恵まれること・安産であり平安な家庭を築くこと・無病息災、特に下半身の病気にならないことと早期治癒すること」といったオモイ・ネガイを感じ取り、ご神体にして崇め祀って（尊び、敬い、祈りの中心にすること）厚く信仰してきたのです。

4500 年前に懸命に生きた人々の「死生観」「自然観」を…今なお、実感できるのは、1000 年以上「石棒」を作り続けた遺跡を見ているからです。それは例えば、100 年以上続く商店を老舗（しにせ）と言い、尊敬のまなざしを向けます。さらに、400 年以上も維持継続している飛騨市内のお祭りや郷土芸能など世界の遺産として認められます。つまり、長く続けているモノには相当な価値を感じるからです。

でも一方で、最も原点として大切なことがあると思います。それは…、今を生きる私たち飛騨人も、縄文の民と同様、『自然を敬い』『自然と共有しよう』という生活姿勢や考え方を持ち続けているからではないでしょうか。『自然』に寄り添って平安に生きていく、そこに「オモイ・ネガイ」の土台を置けることが「祈る」原点なのではないでしょうか。

関連展示

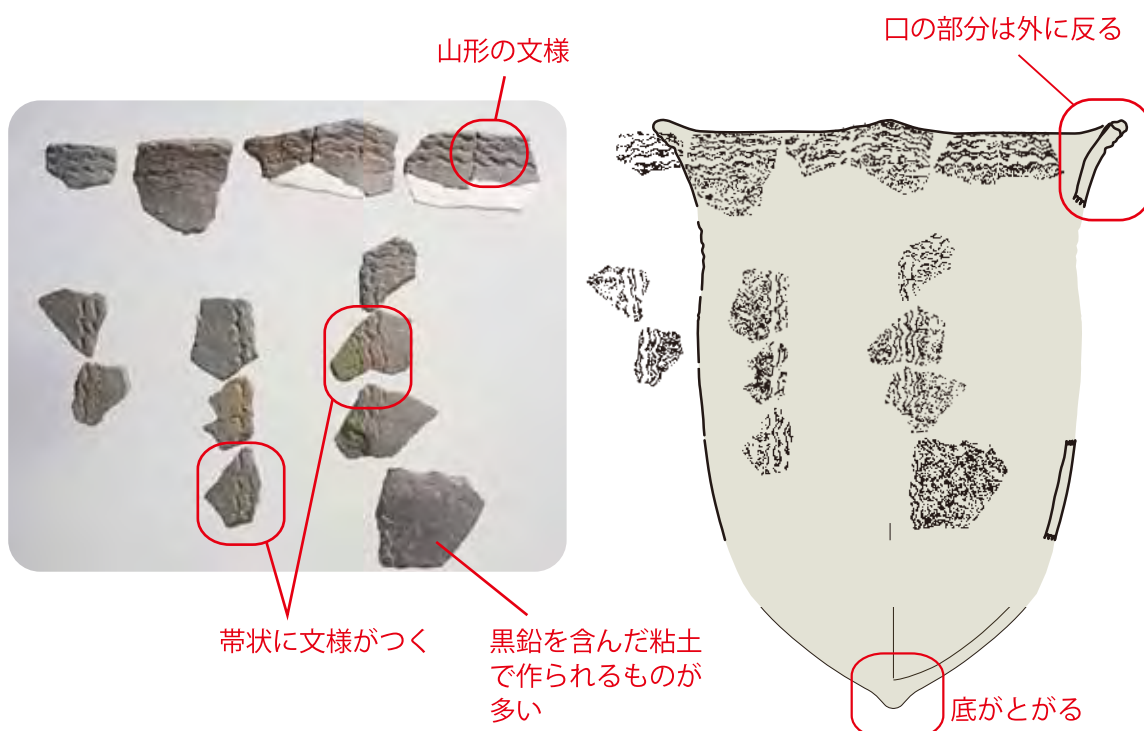
さわいせき さわしき 沢遺跡と沢式土器

－縄文時代早期に、飛騨市から全国に広がった－

沢遺跡は県立古城高校の裏山、飛騨市古川町上気多字沢の山麓の斜面にあります。縄文時代早期、今から 9,000 ～ 6,000 年前の遺跡です。この早期を代表する縄文土器を「押型文土器」^{おしがたもん}と言います。押型文とは、鉛筆ぐらいの太さの棒に山形・楕円・格子目などの文様を刻み、土器の表面を転がして凹凸を連続してつけたものです。

沢遺跡は昭和 39 年（1964）の大野政雄氏による予備調査を経て、昭和 42（1967）年に発掘調査が実施されました。主として押型文土器が出土し、佐藤達夫氏により「沢式土器」として東日本系押型文の最古段階に位置づけられました。その特徴は、①土器全面ではなく部分的に帯状に押型文をつけること、②押型文は山形であること、③黒鉛が混じった粘土が多いことなどです。

飛騨地域で押型文土器が出土する遺跡は 100 ケ所ほどで、うち沢式土器が約 30 ケ所で出土します。また、長野県はじめ神奈川県まで分布することが分かっています。日本全国のどこで見つかっても、飛騨市「沢式土器」と呼ばれることになっているんです。このように「標識」^{ひょうしき}になる土器が見つかった遺跡が、古城高校の裏山にあるのです。



関連展示

なかのやまこし

重要文化財「岐阜県中野山越遺跡出土品」

－唯一、国の重要文化財になった塩屋石の石棒！－

中野山越遺跡は、古川町中野字山越の緩斜面にあります。縄文時代中期、今から 5,000 ～ 4,000 年前の遺跡です。

縄文時代中期という時代は、縄文時代前期より格段に遺跡数が増える時期です。それは住居数の違いにあらわれています。前時期では、飛騨全域で 30 軒程度しか発見されていませんが、中期になると中野山越遺跡だけで 28 軒も見つかっているのです。つまり、人口が増加した時代なのです。

中野山越遺跡では、大量の縄文土器が出土しています。様々な形と文様を持っています。全面に流れを表現したような文様をもつのが北陸、いくつもの区画を設けるのが信州、開いた朝顔のような形をするのが飛騨などです。地元だけでなく、周辺各地域の特徴が取り入れられており、活発な交流があったことを物語っています。

朝顔のように
開いた形の飛騨

区画を持つ文様の信州



流れるような文様の
北陸

周辺地域との活発な交流が分かる中野山越遺跡の縄文土器

石器も、土を掘るのに使用した打製石斧、木を切るのに使った磨製石斧、弓矢の先端に取り付けた石鏃などが出土しています。石材でも、下呂市でした産出しない下呂石や、長野県でしか産出しない黒曜石などが見られます。石器でも周辺地域との交流を示しているものがあるのです。

このような各地の縄文土器と石器のセットが、「飛騨地域における縄文時代中期の典型的な組合せ」を示しているとして平成8年に国の重要文化財に指定されました。

その中に、塩屋石で作られた石棒もあります。

展示してあるように、長さ60cm・太さ15cmもの大きさです。今から4,500年ほど前、塩屋の島遺跡で作られた石棒が、約30km離れた古川町の中野山越遺跡まで運ばれたのでしょ



塩屋から運ばれた中野山越遺跡の石棒



主な展示品

- | | |
|-------------------|------------------|
| ○堂ノ前遺跡の彫刻石棒 | 飛騨みやがわ考古民俗館 蔵 |
| 島遺跡の石棒と未成品 | 飛騨みやがわ考古民俗館 蔵 |
| 島遺跡の石棒加工具 | 飛騨みやがわ考古民俗館 蔵 |
| ○塩屋金清神社遺跡の石棒と未成品 | 飛騨みやがわ考古民俗館 蔵 |
| ○塩屋金清神社遺跡の石棒加工具 | 飛騨みやがわ考古民俗館 蔵 |
| ○塩屋金清神社遺跡の御物石器・石冠 | 飛騨みやがわ考古民俗館 蔵 |
| 天神山遺跡の石棒 | 魚津市教育委員会 蔵 |
| 寺林遺跡の彫刻石棒 | 高原郷土館 蔵 |
| ○宮ノ前遺跡の小型石棒 | 飛騨みやがわ考古民俗館 蔵 |
| ○家ノ下遺跡の小型石棒・石冠等 | 飛騨みやがわ考古民俗館 蔵 |
| 瑞穂遺跡の石棒 | 飛騨みやがわ考古民俗館 蔵 |
| 寺東遺跡の小型石棒 | 高山市風土記の丘学習センター 蔵 |
| 寺林遺跡の小型石棒 | 個人 蔵 |
| 小糸尾萩野遺跡の小型石棒 | 富山県埋蔵文化財センター 蔵 |
| 早月上野遺跡の小型石棒 | 富山県埋蔵文化財センター 蔵 |
| ●早月上野遺跡の石冠 | 富山県埋蔵文化センター 蔵 |
| 店町遺跡の石冠 | 郡上市教育委員会 蔵 |
| 沢遺跡の押型文土器（沢式土器） | 飛騨市教育委員会 蔵 |
| ○岐阜県中野山越遺跡出土品 | 飛騨市教育委員会 蔵 |

◎国重要文化財、○岐阜県重要文化財、●国登録有形文化財

平成 29 年度飛騨市美術館企画展
「石棒の聖地 塩屋を掘る」展示が 1 月

石棒のふしぎ

発行日 平成 29 年 9 月 30 日
編集・発行 飛騨市美術館
〒509-4221
岐阜県飛騨市古川町若宮二丁目 1 番 58 号
印刷 毎日印刷社